



2000年10月 現場見学週間(その2)

日方圭子

英国・サリー大学助産課程学生(ダイレクトエントリーコース)

コミュニティでの2日間

見学後半の2日間は病院を出て、今後3年間コミュニティ実習先になる地域に分かれ、1人ずつコミュニティミッドワイフ(地域で働く助産婦)に付いて仕事を見学した。私が行ったのは東サリー病院から車で10分弱の小さな街とその周辺地域で、5人の助産婦がチームを組んでいる。私を担当して個人指導をしてくれる助産婦(メンター)がちょうどお休みだったので、代わりにチーム内のヘイゼルが2日間仕事を見せてくれた。

とっても早口の彼女は、一見とっつきにくい印象で最初緊張したけれど、いつもの確に指導をしてくれるし、健診に来る女性との関係もいい感じで、すぐに私のメンターもこんな人だったらいいな、と思い始めた。

ヘイゼルに付いて2日間、診療所での初診、妊婦健診と、産後の家庭訪問を見学させてもらった。皆とても快く受け入れてくれた。

初診には45分、その後の健診には1人10分のかなり忙しいクリニックだった。中には子供を連れてくる人もいて、子供が飽きないように相手もしながら妊婦さんの健診をする技術を、ヘイゼルは自然にこなしていた。血圧測定にはどの子供も興味を示すし、ドップラーで胎児の心音を聞くのを楽しみに来ている子もいた。

お母さんのノート

妊娠期の記録は初診の際に作られて、助産婦

健診があるごとに書き込まれるが、これは出産までの間、妊婦本人が保管する。だから健診に来る人は、この妊娠記録ノートと検尿の容器とを必ず持ってきていた。記入する側は本人に見られるのを前提に書きし、妊婦さんが他の医者にかかる場合でも、このノートから妊娠期の情報がすぐに得られる。日本のカルテのように記録が本人の手の届かない医療者の元にあるよりも、このほうがずっと理想的だと思った。

血液検査

見学期間に20人くらいの妊産婦さんに会ったけれど、一番印象に残っている人がエマだ。

彼女は初診の約束の時間に20分も遅れていて、その間少しイライラして待ちながら、ヘイゼルが妊娠記録ノートにGP(一般医)から回ってきたエマの医療的な背景を書き込んでいた。

GPのノートから分かることは、今回の妊娠を支える上で必要な情報なのだろうけれども、これから会う人のプライベートをこんなに知ってしまっていていいんだろうかと、戸惑う内容だった。それによると、育った家庭環境のせいか「ハイリスク」要因がいくつもある。スモーカーで摂食障害、薬物障害の経歴あり。4回の出産と3回の流産の間に膀胱炎、うつ病、睡眠障害が起きている。

「もう来ないかもしれないわね」と諦めた頃、エマが就学前の子供2人を連れてばたばたと入ってきた。遅れた原因は子供たちらしい。やっ

と落ち着いて、一通りの問診が終わり、あとは
血圧と血液検査。一般の血液検査に加え2000
年の7月からはHIVの検査も導入されて、政
府はこの検査率を上げたい意向なので、ヘイ
ゼルが検査の説明をして「HIVとB型肝炎はオ
プションだけれどどうする？」と聞いたとき、
エマの様子が怪しくなった。

今にも泣き出しそうな表情で「HIV検査はし
たくない。前の検査で大丈夫だったから」と繰
り返す。「したくなければしないでもいいのよ」。
時間が押しているのに、ヘイゼルはこの話題を
終えて先に進みたいのに、エマの感情は高ぶっ
てなかなか収まらない。取り乱したことをあや
まりながら、彼女は最近親しい友人がAIDS
で亡くなったことを話し始めた。その女友達が
AIDSを発病してからも、今までどおり親しい
関係を続けてエマはお見舞いに通っていた。け
れど病状が重くなった彼女を見るのが辛くなっ
てきてからは、足が遠のいてしまったらしい。
結局友人は亡くなって、彼女の最期の時期に一
緒にいてあげられなかったことがずっとエマを
苦しめて、それを後悔しているようだった。
「もうHIVのことは考えたくない、彼女のこ
とを思い出すから」としばらく泣いていた。

私は大人の感染率が10%といわれる南アフ
リカに滞在した経験と、助産婦の仕事内容から
HIVに関心を持ち、ボランティアで短期間感
染者と関わる機会があったので、このときエマ
を身近に感じて、もらい泣きしそうになった。
でもこんなとき、現場見学の学生の立場ではど
こまでエマに近づけるのだろうか。「ハグしてい
っしょに泣いちゃあ、やっぱりまずいだらう
な」とぐっと抑えて、ヘイゼルが部屋からい
なくなったときに、まだ感情が高ぶっているエマ
に、「私の友達も闘病生活を続けているよ」と言
うのがやっとだった。

クラスに戻って報告会

金曜日に大学に戻って、1週間ぶりにクラス



ヘイゼルと愛車のボロ。小型車は、コミュニティ・ミッドワイフの仕事にかかせない。

メートと顔を合わせて、現場見学の報告会をし
た。主任教官のアンジーがクラスを見回して
「皆が笑顔で話しているから、とってもいい現
場見学だった、ってすぐわかるわよ」と言った。

クラスのほぼ半数がこの間出産に立ち会って
いた。帝王切開の率がかなり高いようだった。
デビーは「自宅出産を見た」と報告して皆の羨望
を集めていた。デビーのメンターの助産婦は彼
女が自宅出産を見たがっているのを知っていて、
オンコールの夜に電話をくれて立ち会わせてく
れたそう。デビーは3人の子供がいるクラスの
最年長。自分の出産体験に何か不満で、後でそ
れは自分が無知で医療者に任せきっていたから
と反省、助産婦の勉強をする決心をした人だ。

シーラ・キッツィンガーやキャロライン・フ
リントを読んで理想高くいた人は、病院での現
実を見てストレスを感じているようだったし、
たった数日の体験も、一緒に行動した助産婦に
よって大きく左右されていたようだった。

私の場合、期間中日程が合わなくて、自分の
メンターに会えたのは2人とどまった。それ
でも、実際に助産婦の仕事を目の前で見て、や
っとコースの本番に入った気分が高まっている
のは感じた。クラスメートたちの体験を聞いて、
まだ出産を見ていないことで私は焦りを感じ
始めた。